

巻頭言：看護の基本理念

学長 吉田 修

国際看護師協会（ICN）は1953年「看護師の倫理綱領」を採択し、何回かの改訂を経て、2000年の見直しと改訂に至った。また、1987年には「看護の定義」と「看護師の定義」が採択された。これらには看護とは、あらゆる年齢層、家族、集団また社会における人々、それは病める人だけでなく、健康な人、どのような環境におかれている人をも対象としているが、その人々に対して独立してまたは共同で行うものである、看護には健康の増進、疾患の予防そして病める人、障害のある人、死に行く人のケアも含まれる、また環境の安全性の支援と促進、看護にかかわる研究、健康政策への参画、疾病および健康の管理制度、そして教育も看護の重要な任務であると明確に述べられている。

近代の看護は、これだけの重要な責務と役割を担っている。四年制の看護学科を設ける事は、必然であるともいえる。この度、県当局をはじめ多くの関係者の熱意と理解により、本学に看護学科が設立されたことは、地域医療の向上に資するのみならず、ひいては国民、県民の健康の増進、さらに近代看護のサイエンスとアートの進歩にも貢献することになると信じている。

しかし、ここで決して忘れてはならないことがある。

1977年 ICN 東京大会での一つのエピソードを薄井坦子さん（宮崎県立看護大学学長）が紹介している。ある開発途上国の代表者の一人が「われわれは100年以上前のナイチンゲールの時代よりはるかに進んでいる。伝統的な看護の理念に縛られないで、新しい時代の新しい看護を作り上げて行きましょう」と提言した。これに対して、アメリカの代表者であるシュロットフェルトさんが、「たしかにわれわれは新しい時代の、新しい看護を目指している。しかし、われわれがナイチンゲールをはじめとする先達の遺産を充分貫いていないから、新しいと思っているだけかもしれません」といった。私はこのやりとりを読んで大変感銘をうけた。シュロットフェルトさんは言外に「看護の基本を忘れてはいけません」と戒めたのである。

ナイチンゲールの偉大な業績は、専門職としての看護師という職業の確立にある。このことが20世紀の医療に及ぼした影響は極めて大きく、1900年第一回ノーベル平和賞の受賞者に相応しかつたと私は思っている。現にその第一回の受賞者アンリ・デュナンは、ロンドンでの赤十字社国際会議総会で「私は赤十字社の創立者と呼ばれ、ジュネーブ会議の指導者と目されていますが、私の仕事はすべて一人のイギリス婦人のおかげをこうむっているのです。ほかならぬフローレンス・ナイチンゲールその人です」と述べている。

ナイチンゲールは看護をどのようにとらえていたか。「人間の生命力を消耗させるものを、最小にするように、生活過程を整えるのが看護だ」といっている。しかし彼女は「理論というものは、実践に支えられているかぎりは大いに有用なものだが、実践の伴わない理論は看護師に破壊をもたらす」とまでいい、実践を何よりも重視して

いる。また彼女は「自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力をこれほど必要とする仕事はほかにない」と看護の厳しさ、難しさを説いている。

看護の独自性、専門性がよくいわれる。私はこれを否定するものではない。しかし、ケアという営みは人類全体がその遺伝子にまた文化にインプットされているものである。このことは医学人類学をひもとくまでもない。宮沢賢治の《雨にもまけず》に「東に病気のこどもあれば行って看病してやり」「南に死にそうなひとあれば行ってこはがらなくてもいいといひ」とある。看護師のバイブルといわれたナイチンゲールの「看護覚え書き」を読むと、彼女は専門職としての看護職の確立に非常な情熱を傾けたが、看護が医療の中で独自のものであるとは思っていなかったと考えられる。序文に「看護の考え方の法則を述べて看護師が自分で看護を学べるようにしようとしたものでは決してないし、ましてや看護師に看護することを教えるための手引書でもない。これは他人の健康について直接責任を負っている女性たちに、考え方のヒントを与えたいという、ただそれだけの目的で書かれたものである。英国では女性の誰もが、あるいは少なくともほとんどすべての女性が、一生のうちに何回かは、子供とか病人とか、とにかく誰かの健康上の責任を負うことになる。言い換えれば、女性は誰もが看護師なのである。・・・」（ナイチンゲール著作集第二版第一巻139頁）と述べていることから明白であろう。

私に看護の基本についてのキーワードを三つあげるよういわれたならば、先ず第一に思い遣り（コムパッション）を挙げる。これはまさに宮沢賢治の《雨にもまけず》に謳われているところ、病める者、苦しめる者に手を差し伸べようとする深い思い遣りであり、そしてこの「ところ」は、すべての人にもともと全て備わっているものだと思う。第二に挙げたいものは、実践・実行である。「看護は一つのアートであり、それは実際的かつ科学的な系統だった訓練を必要とするアートである」といわれているが、まさしく実践・実行のためのものである。ナイチンゲールは実践・実行を伴わない理論は看護師に破壊をもたらすとすら述べている。そして、看護の実践・実行の中で特に重視したいのは観察であり、私が第三に挙げたいのはこの観察である。それは医療チームの中で、看護師にしかできない観察である。看護のアートとしての観察は、常に訓練により進歩する。「訓練を欠いては観察力はほとんど働かないのは本当である。というのは訓練された観察力なしでは、看護師は何を探し見つけてよいのかわからないからである。病人をただ見つめるだけでは観察とはいえない。目で見ること to look は必ずしも見てとること to see ではない」とのナイチンゲールの考えはまさに正鵠を得ているといえる。

歴史的にみて奈良は看護発祥の地といえる。この地において、基本理念に則った看護の実践と教育と研究に最善の努力を傾けようではないか。

（2004年10月4日奈良県立医科大学医学部看護学科設立記念式典における学長挨拶の要旨に加筆したものである。）